

図3 サンチャゴ巡礼道と標高

時の法王レオン 3 世は、ここを聖地に指定したため、10 世紀にはローマ、エルサレムと並ぶキリスト教の三大聖地の一つとされるようになった。また、フランスの修道会やナバーラ、アストゥリア、レオン王国の王侯貴族達は巡礼者のために宿舎や救護院を建て、橋を造り彼らを保護したため、11～12 世紀にかけては、フランス、ドイツのみならず北欧からも毎年 50 万人にもおよぶ巡礼者がピレネー山脈を越えてイベリア半島を横断しサンチャゴを目指した。

新大陸の発見や宗教改革と共に巡礼は下火になったが、今でも巡礼のためサンチャゴを訪れる人は少なくない。巡礼者によって繁栄した巡礼の道沿いには、ロマネスク様式やゴシック様式など多彩な建築・美術群を残す魅力的な街が形成され、巡礼の道は建築史の道とも呼ばれている。

今回の旅は、成田空港を出発し、パリで乗り継ぎポー空港へ飛び、フランスのバスであるピアリッツからバスに乗ってピレネー山脈を越え、ロンセスバージェスに出て、ここから 738km の巡礼の道をたどりながらサンティアゴ・デ・コンポステーラに向かおうというものである。

4. 旅の日程と訪問先

1 日目 (9 月 26 日)

成田空港 12:00 発のエアーフランス AF275 便でパリのシャルル・ド・ゴール (CDG) 空港へ (所要時間 12 時間)。CDG 空港 18:35 分発のエアーフランス IT3879 便でポー Pau へ (所要時間 1 時間 20 分)。ポーからバスでフランスのピアリッツの Hotel du Palais へ。到着は 22 時。

2 日目 (9 月 27 日)

午前中はホテル周辺を徒歩で観光。その後バスでピ

レネー山脈を越え、ロンセスバージェス、パンプローナ、プエンテ・ラ・レイナを見学し、ブルゴス郊外のホテル Landa Palace Hotel へ。到着は 21 時。

3 日目 (9 月 28 日)

ブルゴスのカテドラルを見学した後バスでサント・ドミンゴへ。再びブルゴスに引き返し、レオン Leon へ。レオンのカテドラル、サン・イシドロ教会などを見学後ホテル Parador Hotel San Marcos へ。

4 日目 (9 月 29 日)

アストルガ、オ・セブレイロを見学しながらひたすらバスで巡礼の最終地サンチャゴ・デ・コンポステーラへ。宿泊は、パラドールホテルである Reyes Catolicos。

5 日目 (9 月 30 日)

サンチャゴのカテドラル、市場などを見学。宿泊は昨夜と同じ Reyes Catolicos。

6 日目 (10 月 1 日)

サンチャゴの空港 10:35 発イベリア航空 IB563 便でマドリードのバラハス空港へ。所要時間は 1 時間。バスでマドリード市内を見学後 Hotel Villa Magna へ。

7 日目 (10 月 2 日)

ホテルを 8:30 出発し、バスでマドリードの南のチンチョン、アランフェス、トレドと回りマドリードの Hotel Villa Magna へ。

8 日目 (10 月 3 日)

マドリードのバラハス空港 10:00 発の AF1143 便でパリの CDG 空港へ (所要時間 2 時間)。CDG 空港から 13:25 発 AF292 便で関西国際空港へ (所要時間 12 時間)

5. 成田空港からの旅立ち

成田全日空ホテルから 8 時 45 分発のシャトルバス



写真1 Hotel du Palais から眺めたビアリッツの街

で成田空港第1ターミナル南ウイングへ。出国手続きを済ませ、免税店で MILD SEVEN20 個 (2,800 円) とブランデーREMY X.O. SPECTAL350ml (5,500 円) を買い込み、パリ行きジャンボジェット機 AF275 に搭乗する。12:00 発の予定であったが、出発は 30 分遅れの 12:30 分。

座席はビジネスクラスであるため極めて快適。座席毎に液晶テレビが付いており、ビデオで数種類の映画を見ることができる。その中には、日本語版のものも 2 本あった。1チャンネルでは、刻々と変化する飛行情報を順次フランス語、英語、日本語で表示している。シベリア上空にさしかかったとき画面を見ると下記の表示が現れた。

飛行速度	838km/h
目的地までの距離	5,263km
海拔	10,700m
外気	-54 ° C
経過時間	5:21 分

画面の地図上に飛行機の現在位置が示されているのでどの付近を飛行中なのかビジュアルに確認できる。GPS が利用されているのであろう。

飛行機は地球の自転と反対回りに飛んでいる。太陽はいつまで経っても沈まない。パリの空港に到着したのは手元の時計で見ると 0:30 分。日本では真夜中であるが、太陽は高い。日本との時差が 7 時間であるので、現地時間は 17:30 分。しかし、とても夕方を感じではなく真昼の明るさである。

6. ビアリッツ Biarritz

ビアリッツはフランスの西南端に位置しカンブリア海に面したバスク人の町で、ホテル、別荘が林立する高級リゾート地になっている。

宿泊した Hotel du Palais は、フランスでも最高級のリゾートホテル。ロビーや廊下の壁面にはいかにも高価そうな絵画が飾られている。部屋も広く、長期滞在が可能なようにゆったりした作りになっている。

ホテルの朝食が 7 時からと聞いていたので起きると外はまだ暗闇で、街灯がともっている。道を守る車もヘッドライトを照らしている。8 時を過ぎないと明るくならない。日が暮れるのも遅いが夜が明けるのも遅い。日本に比べて日の出が 2 時間、日の入りが 3 時間くらい遅いようである。

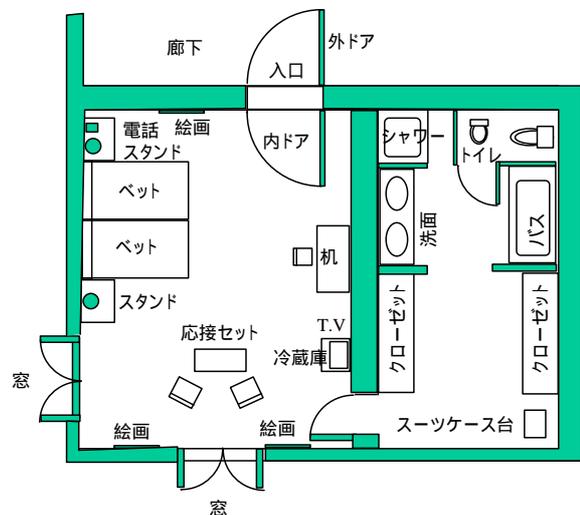


図4 Hotel du Palais の部屋の状況

外が明るくなるのを待って散策にでる。ホテルの直ぐ前には砂浜が広がっている。日本の砂浜と違いゴミは全く見られず大変きれい。夏には大勢の海水浴客で賑わうようである。砂浜の所々にあまり目立たないように設置されたシャワーは、とてもお洒落で周囲の景観にとけ込んでいる。

浜の南側にはコンクリートのアーチ橋(橋長 20m, 幅員 1.5m), 石積み擁壁, アーチ形式の栈道があるが, いずれも周囲の景観と大変良く調和している。狭い街路は, 清掃が行き届き塵一つ落ちていない。朝早く市の散水車が水をまいていた。



写真2 Hotel du Palais の正門

7. ロンセスバージェス Romcesvalles

ピレネー山脈を越えスペインに入って少し行くと, 修道院, レストラン, 礼拝堂などの 12~13 世紀に造られた建物が並ぶロンセスバージェスが現れた。標高 960m のこの地は, ピレネー山脈を越えてきた巡礼者に 3 日間の休養が与えられていた所で 終点のサンチャゴ・デ・コンポステーラまでは, まだ 738km の道のりが残されている。

ロマネスク様式の Charlemagne's Silo は病院で亡くなった巡礼者の遺骨を安置する墓所として利用されてきた。



写真3 ロマネスク様式の Charlemagne's Silo



写真4 礼拝堂に安置されたサンチョ7世の石棺



写真5 礼拝堂の中庭のゴシック様式の回廊



写真6 教会で結婚式を挙げたばかりのカップル

礼拝堂の中には, サンチョ Sancho7 世の石棺が安置されている。この礼拝堂は 13 世紀に建てられた典型的なゴシック様式。中庭の周囲の回廊にゴシック様式の三大特徴である, 尖塔アーチ, フライングバットレス(壁を支える控え), 複雑な構造の交差ヴォルトが見られる。礼拝堂の壁に大きな窓が開けられ, ステンドグラスがはめ込まれているのもゴシック様式の特徴の一つ。

礼拝堂の外にでると 結婚式を挙げたばかりの若い二人が庭でキスをしている場面に出会った。カメラを向け手を挙げると, 花嫁も手を挙げ笑顔で応えてくれた。

8. パンプローナ Pamplona

ロンセスバージェスから 42km 走ると人口 19 万人のパンプローナの町に入る。この町は標高 450m の丘

陵にあり，紀元前 75 年にローマ人によって造られ，905 年にナバーラ王国の首都になり，11 世紀からはサンチャゴ巡礼道の要として繁栄を極めた町。

毎年 7 月 6 日から 14 日にかけてサン・フェルミン祭(牛追い祭りと闘牛)が行われることで良く知られている。狭い路地の周囲に建ったビルのベランダは多数の観客で溢れるようだ。また，ここはバイオリンの名演奏家サラサーテ Pablo Sarasate (1844-1908 年)の生誕地でもある。

パンプローナでは，シティーホール(市役所)，カテドラル Catedral (大司教区のメインの教会)，城塞の跡地を利用したシウダテラ公園を足早に見学した。



写真7 パンプローナのシティーホール(市役所)



写真8 シティーホール



写真9 パンプローナの街の街灯とベランダを飾る花

9. プエンテ・ラ・レイナ Puente la Reina

パンプローナからバスで約 1 時間走ると，プエンテ・ラ・レイナの町に着く。ここは，フランスからピレネー山脈を越える 4 本の巡礼道がはじめて 1 本に合流する地点。

街の西側を流れるアルガ川に石造のアーチ橋(橋長 120m，幅員 3.5m)が架かっている。この橋は 11 世紀の初めに，ドーニャ・マヨール女王が巡礼者のために架けたとされている橋。「女王の橋」という意味で「プエンテ・ラ・レイナ」と呼ばれている。

プエンテ・ラ・レイナの街で昼食を取る予定であったが，路地で牛追い祭りが行われており，街の中に入ることができなかった。

プエンテ・ラ・レイナからブルゴスの町へ向かう途中，山の尾根つたいに 100 基余りの風車が一列に並んで建っているのを見つけた。風車は風向に応じて自動的に向きを変えるようにコンピューター制御されており，発電が行われている。また，スペインでは原子力発電は行われていないとのことであった。



写真10 プエンテ・ラ・レイナ

10. ブルゴス Burgos

(1) ランダ・パラスホテル Landa Palace Hotel

ブルゴス郊外のランダ・パラスホテルへ到着したのは21時過ぎ。

ランダ・パラスホテルは、14世紀の城を移築して造られたもので、ガイドブック「ブルーガイド・ワールド」によるとスペインで一番美しい五つ星ホテルと説明されている。ロビーや庭には上皿天秤計り、馬車などの骨董品が陳列されている。

エレベータはいつの時代のものかよく判らないが兎に角古い。乗るとギーギーと音がして吊りロープが切れはしないかと不安を感じた。一般のエレベータと同じく目的の階のボタンを押すと動き出す。そして、目的の階に到着したときに再びそのボタンを押すと停止する。しかし、ドアは自動的に開かない。そこで横に引いてみたがどうにもならない。押すとギーという不気味な音と共に前方へ開いた。こんなエレベータに乗るのは初めての経験である。

部屋は広く、ツインのベッドの置かれた部屋、応接セットの置かれた部屋、洗面所、風呂場、トイレ、シャワー室に分かれている。寝室の壁や椅子の色調は赤を主体にしており、気が変になりそうであった。窓は三重扉になっている。冬期の寒さが厳しいためであろう。

22時からホテル内のレストランで通訳の河野さんも含めた14名で晩餐会。

朝は8時過ぎにバイキング方式の朝食を済ませホテル周辺を散策する。



写真11 Landa Palace Hotel



写真12 Landa Palace Hotel 近くの高架橋



写真13 Landa Palace Hotel 近くの高架橋

ホテルは市街中心から約 1.5km 離れており、周囲に建物はないが、高速道路のインターがあったので高架橋を見学する。上部構造はPC 箱桁形式であろうか。橋脚は断面が異常に小さくスレンダーである。

(2) カテドラル

ホテルを 9 時に出発し、バスでブルゴス市内のカテドラルに向かう。ブルゴスは、標高 860m の盆地に開けた人口 18 万人の町。

カテドラル Catedral とは大司教のいる聖堂のことで、主要都市のみにある。

ブルゴスのカテドラル(大聖堂)は、トレド、レオンのものと共にスペインを代表する三大カテドラルの一つで、完成までにおよそ 300 年の歳月が費やされたとされている。

カテドラルの前にはアルランソン川 Rio Arlanzon が流れており、石造アーチ橋が架かっている。橋を渡るとサンタ・マリアの門 Arcos de Santa Maria がある。中世の塁壁に囲まれたブルゴスの市門の一つで、マリア像、天使像の下に 6 人の英雄像が、そして上段中央にはカルロス五世、その右にエル・シッド像が彫られている。

カテドラルの中には、ユネスコから世界文化遺産の指定を受けた黄金の階段、水牛の皮と人間の



写真 14 ブルゴスのサンタ・マリアの門



写真 15 ブルゴスのカテドラル



写真 16 昼食をとったレストラン

髪の毛、爪で造られたキリスト像、ハバモスカの時計、銀製の馬車など極めて芸術的価値の高いものが見られる。ステンドグラスも非常に美しい。スペインのカテドラルの中では一番美しいと感じた。

カテドラルから外に出るとアルランソン川沿いにプラタナスの並木、盆栽のように手入れされた樹木の植えられた公園が平行してある。プラタナスの枝は互い引っ付いて一体化している。

11. サント・ドミンゴからレオンへ

(1) 道路と車窓の景色

ブルゴスのカテドラルを見学した後バスで南の方向に約 1 時間走り、サント・ドミンゴ Santo Domingo を訪れる。ここを見学した後再びブルゴスに引き返し、次の訪問地レオンを目指す。バスは時速 80km/h で真っ直ぐな一般国道 N120 号線を西にひたすら走る。地平線の彼方まで広大な畑が広がっている。標高は 850m。レオンの町に近づくとそれまでのトウモロコシ畑が一面ひまわり畑に変わる。種から食用油を取るのであろう。

途中から高速道路 A231 号線に移りレオンの町に入る。一般国道は N、高速道路は A と表記されている。制限速度は一般国道が 100km/h、高速道路が 120km/h。ただし、バスは 80km/h。

(2) スペインのトイレとバル

スペインではどこに行っても公衆トイレはない。このため、バル Bar に入って借りることになる。

トイレのことをスペイン語ではセルビシオ Servicio というが、バルやホテルなどのトイレの入り口には ASEO と表記されている。

バルでトイレを借りる場合は、ワイン Vino (ビノ) もしくはビール Cerveza (セルベッサ) を注文するのが一般的。ビノ・チントと言えば赤ワインをグラスについでくれる。グラス一杯の値段は通常 75 ペセタ。65 円程度である。ちなみに一般の商店でミネラルウォーターを買くと、小さいペットボトルに入ったものが 100 ペセタ。

バルはどここの町にいても必ず数件ある。朝早くから夜遅くまで営業をしており、地域の社交場になっている。バルは一般に酒場、カフェ、大衆食堂という三つの機能を併せ持っている。早朝のバルは出勤前のサラリーマンが利用し、タパス tapas (つまみ) の仕込みが始まる 9 時頃になると近所の老人達がやってくる。

11 時頃には買い物帰りの主婦がオンセ (間食) を

とりに子連れでやってくる。午後の 1 時から 4 時は昼食の時間で、レストランに早変わりする。午後 9 時頃になると会社帰りのサラリーマンで賑わい、11 時頃以降は夕食を終えた帰りにまた一杯引っかけに来る、これがバルの一日であり、市民生活にとってなくてはならない存在。

スペインのバルで面白いのは、小エビの殻でも、唐揚げの骨でも、オリーブの種で、手を拭いたティッシュでも、煙草の吸い殻でも、何でもかんでも床にポイ捨てること。バルの床がそのままゴミ箱になっている。床にゴミが散らかっているほど、タパスがうまく繁盛している店のようである。

今回の旅でもトイレの都度バルに立ち寄って、ワインもしくはビールを飲まなければならなかった。

写真 17 は、ブルゴスから 20 分程度走った所で昼食をとったドライブインの中のバル。看板には、PENSION RESTAURANTE と書かれてあり、宿泊所とレストランとバルを兼ねていた。カウンターの床はゴミだらけ。

12. レオン Leon

(1) レオン市内見物

レオンは、巡礼路の中ではパンブローナ、ブルゴスに次いで大きい人口 13 万人の都市。南北にベルネスガ川 Rio Bernesga が流れ、川の東側に市街が広がっている。

レオンに入って先ずサン・イシドロ教会 Basilica de San Isidro を見学した。この教会は聖イシドロの遺骨を納めるために 1063 年に建設された。12 世紀に新約聖書と狩を題材にして天井に描かれたフレスコ画が特に有名。

次に徒歩でカテドラル Catedral に行く。このカテドラルの別名はサンタ・マリア・デ・レグラ Santa Maria de Regla。13~14 世紀に建設された理想的なゴシック建築とされ、スペイン三大大聖堂の一つに挙げられている。堂内の華やかなステンドグラスが大きな特徴。レオンの旧市街は、狭い道が入り組んで分かりづらいが、ホタテ貝のシンボルマークが路上の所々に埋め込まれ巡礼の道であることを示している。旧市街のほぼ中央にサント・ドミンゴ広場 Plaza de Santo Domingo があり、ここに大勢の家族連れやアベックが集まってきた。スペインでは日曜日の夜になると家族連れで食事やウインドーショッピングを楽しむ。若い人はジーンズ姿が目立ったが、中年以上の方はドレスアップしおしゃれを楽しんでいる



写真 17 バルの床はゴミだらけ



写真 18 レオンのサン・イシドロ教会



写真 19 サンチャゴ巡礼道を示す帆立貝のマーク



写真 20 レオンのカテドラル

(2) レオンのパラドール

パラドールとは、中世の城、修道院、救護院、貴族の館など歴史的建造物を改装した国営のホテル。観光による外貨獲得の国策として 1928 年から始められた。

パラドールはスペイン全土に 83 箇所ある。この内、今回の旅で利用するレオンのサン・マルコスとサンチャゴのレイエス・カトリコスの 2 つのみが 5 つ星のホテルになっている。

レオンのサン・マルコスは、かつてのサンチャゴ騎士団の本拠地で、12 世紀には巡礼者の救護院、16 世紀から修道院となった。外壁に施された 100m におよぶプラテレスコ様式の彫刻群、カトリック両王の肖像画が飾られた豪華な室内は、さすが 5 つ星のホテルと考える。

ホテルの前はサン・マルコス広場となっており、咲き誇った真っ赤なサルビアと紫のラベンダーがとてもきれい。花壇の中には水道管が張り巡らされ、早朝にはスプリンクラーによる散水が行われていた。



写真 21 パラドール・サン・マルコス



写真 22 パラドールの前のサン・マルコス広場



写真 23 サン・マルコス橋

(3) レストランでの夕食

スペインの夕食は夜の9時頃から始まる。随分と遅いが、外が暗くなるのが9時頃だから当然かも知れない。

この日はスペインに来て、外での最初の夕食である。ジャケットとネクタイ姿に着替え、山下氏、文野氏、村里氏、上甲氏と連れだってサント・ドミンゴ広場近くに出かける。ほとんどの店が日曜日の夜とあって一杯であったが、地下のバルを兼ねた大衆レストランが比較的空いていたので入る。

まず最初に覚え立てのスペイン語でセルベツカ(ビール)とビオ・チント(赤ワイン)を注文する。スペイン語で書かれたカルタ(メニュー)を見ても料理が分からないので英語のメニューを頼み、ビーフステーキを注文する。

早速、グラスにつがれたビールとワインが2本運ばれてきた。ワインは1本注文したはずであったのでそのことを伝えると、コルク栓が抜かれていたにも関わらず気持ちよく持ってきてくれた。

ビーフステーキは4人前注文したが、1人前の量はイタリアと違いあまり多くなく、一人で十分食べられる程度であった。しかし、期待に反して肉が薄くしかも硬い。旅の疲れで歯が浮いていたため、半分も食べることができなかった。

日本を離れてからほとんど野菜を食べていない。無性に野菜が食べたくなったので、トマトのサラダを注文する。スペイン料理の味付けはオリーブ油が中心になっており口に合わないので、何も味付けしないように頼み、食塩のみかけて食べる。変なもので味付けするよりもこの方があっさりしておいしい。

食事代は一人当たり2000ペセタ。約1800円。

(4) 夜店でのショッピング

食事の後町を散策していると、サン・フフランシスコ広場の夜店に出会った。高知の日曜市のように屋台がたくさん並べられて、野菜、果物、花、衣類、革製品、人形などいろいろのものが売られ、多くの人で賑わっていた。

陶器で造られた魔女の人形を値切って買おうということになった。このとき文野氏が日本から持ってきた翻訳機能の付いた電卓が大いに役立った。電卓の液晶画面に翻訳されたスペイン語がアルファベットあるいはカタカナで表記されるが、それを喋ってもなかなか相手に通じない。翻訳機能の付いた電卓が珍しいのか、変な日本人が面白いのかたくさん見物人が集

まってきた。その中に中学生らしい女の子が数人いたので、電卓で表示されたスペイン語を見せ、それを売りに喋ってもらった。

ディスカウントは1割程度であったが、思い出に残る楽しいショッピングができた。

(5) ベルネスガ川に架かる橋

レオン市街周辺のベルネスガ川には6本の橋が架かっている。写真撮影が可能な明るさになる8時30分頃からサン・マルコスホテルの前の通り Avenida Suoro de Quinones に架かっているサン・マルコス橋 Puente de San Marcos、その約400m上流のプレチル橋 Puente Pletil、さらに200m上流の橋を見て回る。いずれも橋長は100m程度。

サン・マルコス橋は12世紀に造られた石造の8径間連続アーチ橋。幅員は約3.5m。

プレチル橋は最近架設された(1996年)ばかりのPC斜張橋形式の歩道橋。洗練されたシンプルなデザインが構造美を感じさせる。最上流の橋も架設年度の比較的新しいPC連続箱桁橋。

交通量の多いPeregrinos通りで面白いと思ったのは、突起の付いたタイルが横断歩道の手前で車道を横断するように設置されていることである。タイル上を自動車が通過すると音と衝撃が発生するので、運転手に横断歩道が近づいていることを体感で知らせることができる。

横断歩道に信号機は設置されていない。信号機よりも突起付きタイルの効果が大きいのかも知れない。



写真 24 1996年に完成した斜張橋の歩道橋

13. レオンからサンチャゴへの道

(1) アストルガ Astorga

レオンからN120号線を約50km走ると人口1万3千人の静かな地方都市アストルガに到着する。

日本では、電線の地中化はほとんど進んでいないが、スペインでは小さな地方の町でも電柱や電線は見ら

れない。この点からも日本のインフラ整備の遅れを感じる。

アストルガには、天才建築家ガウディーの設計した司教館 Palacio Episcopal de Astorga がある。1889年に起工し1913年に完成したとされている。教会と城と宮殿が一体となったこの建物は、現在、巡礼博物館 Museo de los Caminos として入場料150ペセタで一般に開放されている

(2) オ・セブレイロへの道

アストルガを過ぎると一般国道にほぼ平行して高速道路の建設工事が行われていた。高架橋は全てプレテンション方式のPC桁。オーバブリッジの橋台の前面は、テール・アルメによる土留め工が標準工法として採用されている。壁高欄にもプレキャストコンクリートが使用されている。

ヨーロッパはプレキャストコンクリートが大変普及している。日本でも今後は益々プレキャスト化されることであろう。

土質はまさ土である。盛土法面には芝張りによる緑化が行われているが、根付きは悪くエロージョンがいたるところで見られた。切土法面は切りっぱなしか、自然石が張られている程度で、コンクリートの吹付けや擁壁は見られない。何力所かの法面で円弧滑り破壊をしている箇所があった。



写真25 アストルガの司教館（パンフレットより）



写真26 橋台全面の土留めはテール・アルメが標準

スペイン北部地方を横断すると、東と西の地方で地質や文化の違いがよく分かる。

ブルゴスの周辺は土の色が白く、石灰岩が主体であったが、こちらは褐色の花崗岩が主体になる。民家の屋根の色も、東の方はオレンジ色で統一されているが、西に来ると黒色になる。また、西の方は雨量が多いため緑も豊富になる。

ピレネー山脈を過ぎてからは広大な平地ばかりであったが、アストルガを過ぎると地形が険しくなり、谷（水はない）を跨ぐ橋やトンネルが現れる。落石注意の道路標識も見られる。ロックネットやストーンガードがわずかに施工されているものの落石対策は非常にお粗末である。

(3) オ・セブレイロ O Cebreiro

オ・セブレイロは標高1,300mのセブレイロ峠にあるケルト人の住む小さな村。巡礼の道の最後の難所であり、ガリシア地方への玄関でもある。

9～10世紀に建てられたプレ・ロマネスクの石積のサンタ・マリア教会、救護所（現在宿屋になっている）、カストロ Castro と呼ばれる粗朶葺きの家がある。カストロとは下部が石積で中央に掘立柱が置かれ、これを軸にしてちょうど傘のように粗朶葺きの屋根を載せた超原始的な家。

セブレイロ峠からの展望は素晴らしい。緑豊かな山々、その斜面に拓かれた耕作地などの景色は、日本の田舎の風景にも似て気持ちが安らぐ。



写真27 ケルト人住む家カストロ

ここには10戸ほどの民家があり、住んでいる人々の生活は一昔前に見られた日本の田舎とよく似ている。家の側にはロープを張り洗濯物が干され、放し飼いにされた鶏が野草を突っついていいる。住居は牛舎と一体となっている。そのためか蠅も多い。



写真28 ケルト人住む家

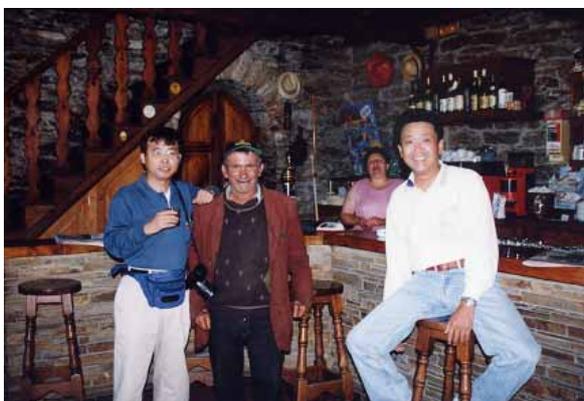


写真29 オ・セブレイロのバル



写真30 バルの入り口



写真31 歓びの丘に建てられている巡礼者の像

(4) 歓びの丘 El Monte del Gozo

サンチャゴ・デ・コンポステーラの町に入る手前に歓びの町とカテドラルの塔が見える。

山賊に襲われたり病気になったりしながら何10日もの長い旅を続けてきた巡礼者が、初めて聖ヤコブの町を眺めることができた場所である。二人の巡礼者がサンチャゴの町を眺め喜びを表しているモニュメントが造られている。

我々の巡礼の旅は、整備された一般国道や高速道路をバスに乗って旅したものであり、徒歩で旅した中世の巡礼者の苦勞とは比較すべもない。しかし、ピアリッツからの800kmの旅は長く、サンチャゴの町が見えた時は、巡礼者の感動が伝わってきた。

歓びの丘で枝の先の葉が黄色いヒノキに似た植木を見つけた。植物学に大変詳しい白砂さんに聞くと、これはアスナロの一種であるが先が黄色いものは日本にないとのことであった。挿し木にすればつくと教わったので、上手くいけば金儲けができると考え、枝を折って持ち帰ることにした。

14. サンチャゴ・デ・コンポステーラ Santiago de Compostela

(1) サンチャゴの町

サンチャゴ・デ・コンポステーラは、9世紀初頭にキリストの12使徒の一人聖ヤコブ(スペイン名はサンチャゴ)の墓が発見され、そこに教会が建てられて以来、数知れない巡礼者を迎え入れた街で、北大西洋沿岸のリアス・バッハスから内陸へ約70km入った標高260mの所にある。地形は周囲を山に囲まれたすり鉢状で、カテドラルの建っている旧市街は坂道が多い。

コンポステーラとは、「星空の野」という説と「お墓」という説があるようである。

旧市街の中心には、オブラドイロ広場 Plaza del Obradoiro がある。この広場を取り囲むように東側にカテドラル、西側にラホイ宮殿(市庁舎)、北側にパラドル・ロス・レイエス・カトリコス、南側にサン・ヘロニモ神学校が面して建っている。カテドラルの東側にはキンターナ広場 Plaza de la Quintana があり、この広場の南北および東側に土産物店やレストランが密集している。



写真 32 パラドールホテル Reyes Catolicos の入り口

(2) パラドールホテル Reyes Catolicos

サンチャゴでの宿泊は二日ともパラドールホテル・レイエス・カトリコスであった。このホテルはカテドラルの前のオブラドイロ広場の東側に面している。15 世紀末に修道院として建てられたもので、ホテルに改造される前は王立病院であった。ローマ法王ヨハネ・パウロ 2 世をはじめ世界の VIP が宿泊したことでも知られている。

日本人の観光ツアーも多く見られ、レオンのパラドールで出会った日本人観光客も宿泊していた。

元々修道院として建てられたためか、廊下の幅は狭く約 1.2m。廊下の角やエレベータの中に、お賽銭箱のようなブリキで作られた箱が置かれてあった。どうもゴミ箱のようである。

エレベータはレオンのパラドールのものと同じ構造。日本のエレベータと違うのは、自動ドアの外に扉が付いていること。目的の階に着くと自動ドアが開くが、その前にも扉があるので、これを手で前に押して開けないと出ることができない。

このホテルだけは、日本の温泉旅館のように朝食と夕食がセットになっている。

これまでの地方では赤ワインが一般的であったが、サンチャゴは魚介類の料理が多いためか白ワインが一般的なようである

(3) 旧市街周辺の散策

サンチャゴに着いた翌朝 約 1 時間かけて旧市街の外の西側を、また午後には 1.5 時間かけて南側の地区を散策した。

オブラドイロ広場の西側には、広場に通じる二車線道路 Avenida de Xoa XX があり、この道路に面した歩道にモダンな柱廊がある。なぜこのような柱廊が設けられているのかわからないが、構造は極めてシンプルでデザインが素晴らしい。東端の入り口の屋根の高さは 3m 程度で西端の出口では 5m 程になっており、縦断方向に大きな傾斜が付けられている。遠近感を強調するためのデザイン上のテクニックであろう。

この柱廊の横は展望台になっており、その下が地下駐車場として利用されている。周辺は緑地で、その中を歩いている歩道の照明灯も大変お洒落。

案内標識も洗練されたデザインになっている。

駐車場から坂道を下っていくと、小学校や大学の建物、公園があった。ここの公園でも芝生にスプリンクラーで散水が行われていた。スペインでは、「シャワーの水がなくても木には水をやる」というほど緑を大切にす。公園の池はきれいな水で満たされアヒルが泳いでいた。

不思議なことにサンチャゴの街中には川が見あたらない。ガイドブックで調べると、街の南側を東西に流れるサレラ川 Rio Sarela が記されていた。川があれば、きっと珍しい橋もあるに違いないと思い、午後の 3 時から一人で行ってみた。ところが、いくら探しても地図に示されているような幅の川

はない。道行く大学生らしきアベックに片言の英語で話しかけてみたが全く通じない。英語はスペイン人にとって、日本で馴染みの薄いフランス語やドイツ語のようなものかも知れない。地図に示されていた川とは、幅 4m 程度の溝であり、期待が大きはずれた。

サンチャゴのあるガリシア地方は一年の内 300 日も雨が降るとガイドの河野氏が言っていたが、その雨は一体どこに流れるのだろうか。



写真 33 サンチャゴのモダンな柱廊



写真 34 センスの良い案内標識



写真 35 サンチャゴのカテドラル

(4) サンチャゴのカテドラル

カテドラルの正面玄関は、オブラドイロ広場に面している。左右に高さ 70m の塔をもつ正面玄関オブラドイロの門 Puerte de Obradoiro は、18 世紀前半の代表的なバロック建築家カサス・イ・ノボア Casas y Novoa による。

オブラドイロの門をくぐって中に入るともう一つ門が現れる。これが栄光の門 Portico de la Gloria。ロマヌスク時代の巨匠マテオ Maestro Mateo の作で、1168 年から 20 年の歳月をかけて完成されたスペイン・ロマヌスクの最高傑作。オブラドイロの門ができる以前は、栄光の門が正面玄関になっており、巡礼者達は苦難の旅の目的が達成されたことを門柱に手をつけて喜んだと言われている。800 年以上もの間巡礼者たちが手をついたため、石がすり減って手形ができている。

この門をくぐって奥に進むと、金銀で装飾されたケバケバしい大祭壇がある。祭壇の両脇には地下納骨堂

への入り口があり、19 世紀末に新たに銀細工が施された、サンチャゴの棺が安置されている。

堂内には天井から香を焚く巨大な器が吊り下げられている。垢で汚れた巡礼者達の悪臭を消すために香が焚かれていたようである。

(5) サンチャゴの市場

カテドラルから歩いて 10 分くらい北に行くと市場がある。市場の建物の長さは約 50m で、列ごとに衣服、野菜・果物、肉、魚を売る店が並んでおり、地元の買い物客で賑わっている。

肉屋では、肩から切り落とした豚の頭が並べられてた。八百屋では紐で結ばれた大小のタマネギやニンニクが吊り下げられていた。



写真 36 サンチャゴの市場



写真 37 市場の中の肉屋

(6) ショッピングとレストランでの食事

カテドラルの南側に土産物店、レストランなどの商店街がある。迷路のように入り組んだ狭い街路の両側に店舗が並んでいる。まるでヴェネツィアのような。

サンチャゴは銀細工が有名。銀のネックレス、ナイフ、スプーン、栓抜きが売られている。ホテルの中の店舗で見ると、スプーンが 2~3 千ペセタするが商店街ではその 1/10 程度の値段で売られている。たぶんイミテーションだろうが、土産用としては手頃な値段である。

その他にも絵皿、セラミック製の人形、民族衣装を

着た人形が多く売られていた。

レストランには魚介類の料理を食べらす店も多い。店頭陳列ケースや生け簀の中に魚介類を並べてあるので、それを見て店を選ぶことができる。

サンチャゴに着いた翌日の昼食を食べるため、文野氏と村里氏の3人で出かけた。ガイドの河野氏よりサンチャゴではザリガニ Cigarrasala が美味しいと聞いていたので、それが陳列してあるレストランを探し、Restaurante-Meson A Charca という店に入る。

店の入り口から奥にかけてカウンター席、クロスが掛けられていないテーブル席、白いクロスで覆われたテーブル席に分かれていた。奥の白いテーブルクロスで覆われた席はコース料理を食べる場所と思われるので、テーブルクロスのかかっていない中程の席に着き、まずセルベッサ（ビール）を注文する。

料理はメニューを見てもよく分からないので陳列ケースに並べられているエビを指してザリガニを頼む。エビを焼くのに時間がかかりそうなので、酒のつまみにするため大皿に入れてカウンターに並べられているイワシ Sardina を注文する。酢とオリーブ油で味付けされたもので、ビールのつまみにはちょうど良い。

ザリガニの焼き物は身が少なくて食にくいだが、河野氏の推薦だけあって味は抜群にうまい。殻は比較的柔らかいので、むかずにそのまま食べることもできる。

ザリガニを食べ終わって、ウェイターにとっても美味しかったと言うと、ロブスター Longest をすすめてきた。昼間からロブスターは贅沢なので夕食で食べようと思っていたが、わずか1,000ペセタであるというので思わず注文する。伊勢エビに比べて数倍大きく、三人で食べても十分な量がある。塩焼きはとても美味しい。

支払いの段になって、Longest は一桁多い10,000ペセタであるという。最初に値段を聞き違えたのかと思ったが、後で河野氏に聞いて1,000ペセタは100g当りの単価であることが分かった。それでも一人当たり5,000ペセタ（約4,500円）であり十分満足できた。

15. マドリード Madrid

(1) サンチャゴからマドリードへ

市内から12km程郊外にサンチャゴの空港がある。そこから10:35発のイベリア航空IB563便でマドリードのバラハス空港 Aeropuerto de Barajas へ飛ぶ。所用時間は1時間。

マドリードに近づいたとき機上から下を眺めると、

山の上に大きなダムが見える。盆地の周囲に発達した段丘が明瞭に確認される。薄い赤茶色の土地に点々と生えている緑の木はオリーブと葡萄の木。広大な丘陵地一面にオリーブと葡萄の木が植えられている。

スペインの葡萄の栽培面積は136万haでダントツの世界一。ワイン生産量は370万klで国民一人当たり95l。これはイタリア、フランスに次いで世界第3位。ちなみに、日本のワイン生産量は国民一人当たり0.5l、清酒生産量は11l、スペインのワイン生産量がいかに多いかが分かる。ワインを水代わりに飲んでいるのも理解できる。

(2) マドリード市内観光

マドリードが首都になったのは、スペインの黄金期に君臨したフェリッペ2世 Felipe がマドリードに移り住んだ1561年から。

首都にふさわしい都市となったのは、18世紀後半のカルロス3世の時代で、この時に王宮、プラド美術館、アルカラ門の建設、レタイロ公園などの整備が行われた。

バラハス空港はマドリード市内から13km離れた郊外にある。空港からバスでマドリード市内に入り、最初にセルバンテスの像のあるスペイン広場 Plaza de Espana に寄る。像の下にはドン・キホーテとサンチヨ・パンサの像があり、これらを見下すように作者セルバンテスの像が座っている。

その後、王宮の正面にあるアルメリア広場を訪ねる。広場の中央には馬に乗ったフェリッペ二世の像がある。王宮はフェリッペ5世がイタリアの建築家F・ユヴァーラに設計を依頼し、1738年に着手し、1764年に完成したものだ。

その他、1778年にカルロス3世によって作られたマドリードのシンボルであるアルカラ門、コロンプスの像が建ち、延長の長い滝のような噴水が見られるデスクプリミエント公園、ゴヤの絵画で有名なプラド美術館、ポルトガルやフランスへの国際列車が発着する超近代的なチャマルティン駅、スペイン版新幹線アーベ Ave の発着するアトチャー駅をバスの車窓から見物する。

マドリード市の西側にはマンサナーレス川 Rio Manzanares が流れ、市の周りを高速道路が走っている。このため沢山の橋梁がある。それらの見物や世界的に有名なプラド美術館の名画を鑑賞したいと思っていたが、時間的余裕がなく、それらが叶えられなかったのは誠に残念であった。



写真 38 スペイン広場のセルバンテスの像



写真 39 王宮とアルメリア広場のフェリッペ 2 世の像



写真 40 マドリードの象徴アルカラ門



写真 41 カステリャーナ大通り

(3) シエスタ

スペインではシエスタという習慣がある。午後の 1 時から 4 時までの 3 時間は昼休みがあり、昼食や昼寝をとる。このためスペイン人は余り働かないということにはならない。

スペインの 8 時はまだ薄暗いが、街は通勤ラッシュになる。ホテルの横の工事現場では 8 時から作業が行われていたし、サンチャゴでは 8 時 30 分頃学童が登校していた。会社の仕事は日本と同じ 9 時頃から始められるものと思われる。

そして 13 時まで働き、昼寝の後再び 16 時から 20 時まで働く。20 時といってもまだ明るく、日本の 17 時くらい感じである。従って、1 日の労働時間は 8 時間となり、日本と変わらない。

日本でも、朝の 6 時から 10 時まで仕事をし、休憩した後、再び 13 時から 17 時まで働けば同じことである。むしろこの方が、疲労が少なく、仕事ははかどるかもしれない。ただし、何時間もかけて通勤しなければならないような所では無理な話であるが。

なお、スペインで子供がつくられるのはシエスタの時間帯が多いそうだ。

(4) マドリードでのショッピング

シエスタの時間には、バルやデパート以外の殆どの店が閉まってしまう。このためショッピングができるのは 10 時～14 時、17 時～20 時の間に限られる。シエスタの習慣がなく、時間を効率的に活用したい観光客にとっては何とも不便である。

巡礼の道が通っているスペイン北部は治安がとても良かったが、マドリードは引ったくり、置き引き、スリ、強盗などの犯罪が多い。ガイドの河野氏より、「パスポートなどの貴重品は持って歩かない、大通り以外の裏道や地下鉄には行かないでほしい」という注意があった。日本人観光客がどの程度被害に遭っているのか訊ねると、多い日には日本大使館に行列ができるほどだと答えられ、これには驚いた。スペインの失業率は 20%を超えている。これが治安を悪くしている原因であろう。

マドリードは、市街の中央を南北に大きなカステリャーナ大通り Paseo de la Castellana が通っている。この通りに平行した一つ東側の通りがセラーノ通り Calle de Serrano で、ロエベ Loewe、ジェルトラ Geltra、グッチ Gucci、エルメス Hermes、シャネル Chanel などの有名ブランド品を売る高級ブティックが開店している。

これらの高級ブティック店には、治安の悪さを象徴するかのように入り口と店の中に警備員が立っていた。

香港やシンガポールなど東南アジアの国では、高級ブティック店や貴金属店に女性の店員が大勢いて購買をしつこく勧めるが、ここでは店員が少なく店内はひっそりしている。それだけに警備員の姿がよけい目に付く。また、観光客に中国人、韓国人の姿を見かけないのも大きな違いである。

人数は少ないものの、高級ブティック店での買い物客に、日本の若い女性の姿が目につく。

(5) マドリードでの食事

マドリード市内観光を終え、カステリャーナ大通りに面したビジャ・マグナホテル Villa Magna にチェックインした後、文野氏と連れだってショッピングに出かけたが、ブティックの開店は午後の5時からであるので、それまでの間に軽く昼食をとることにした。

セラーノ通りに直交したゴヤ通りのバルに入る。この店は、1階がバルとカフェ、吹き抜けの2階がレストランになっていた。カウンター内のウエイトレスは品のあるジャケットの制服を着ており、客も上品で、高級カフェという感じである。

レストランの営業時間はランチが14時から17時、夕食は21時以降であるが、バルは朝早くから夜遅くまで開いているので時間を気にせず利用できる。また、カウンターにはタパス(おつまみ)を盛った皿が並んでいるので、名前が分からなくても食べたい料理を指せば小皿に取り分けてくれるので便利である。

カウンター席に座り、目の前にあった生ビール Cana を注文する。一口飲んだ瞬間うまいと思った。こんなに美味しいビールを飲んだのは初めてである。文野氏によるとこれはとても有名なドイツのハイネッケンとのこと。

料理はジャガイモのサラダとイワシの酢漬けを一皿ずつ頼み、二人で食べたがこれも大変美味しかった。

夕食はスパゲッティを食べたいと思いショッピングセンターの中のレストランで訊ねたがメニューになかった。ホテルのカウンターでスパゲッティの食べられる店を聞き、文野氏とタクシーで出かけたが、そこは本格的なイタリアン料理のレストランでまだ開店していなかった。

セラーノ通り歩いていると、歩道にパエーリャの写真入りの旗を立てたバルがあった。スペインに来てパエーリャを食べない手はない。

スペインの代表的料理であるパエーリャは、もともと8世紀にアラブ人によってもたらされ、東部レバンテ地方で栽培されるようになった米を使ったバレンシアの郷土料理。

この店には、カウンター席とテーブル席があり、会社帰りのサラリーマンのグループ、家族連れ、労働者らしき客などで賑わっていた。大衆的なバルのようであるが、カウンター内のボーイは半袖のワイシャツに蝶ネクタイ、ウエイターは黒のスーツに蝶ネクタイをしている。

ここでもセルベッサを注文する。しかし、昼食の時に飲んだビールの味とは比べものにならない。

エビ、ムール貝、完熟トマトが一杯入ったパエーリャはとても美味しい。一人前、茶碗に2.5杯程度のボリュームがあったが全て平らげる。文野氏は硬い米は苦手とのことで半分以上残していた。

ビジャ・マグナホテルでの朝食は2日とも日本食であった。マドリード一豪華なこのホテルは、以前日本人が経営していたようで、日本人従業員も数人見かけた。そんな関係で、このホテルだけは特別に日本食を食べることができるようである。

みそ汁、沢庵、豆腐、納豆、塩焼きのサーモンなどを食べると胃の調子が回復する。

マドリード最後の夜は、ホテル近くの日本食専門店「SUNTORY 燦鳥」の焼き肉料理で最後の晩餐会が開かれた。

ガイドブックを調べると、マドリードにはこの他にも、みかど、どん底、Naomi、炉端、花友、うはら、東京太呂といった日本料理店が数件あるようだ。

(6) フラメンコショー

マドリードにはフラメンコショーを見せる専門店タブラオ tablao が数件ある。21:30分にホテルからタクシーに分乗して事前に予約されていたタブラオに行く。

小さいステージの周りに約100席のテーブル席があり、ワインやビールを飲みながら、あるいは食事をしながらショーを見るのである。入場料は、飲み物代を含め一人当たり5,000ペセタであった。

観客の1/3は日本人の観光客であった。ショーが始まる前に、女性が赤いハットを客の頭に被せ、カメラをもった男性が写真を撮って回っている。私の頭にも背後から無断でハットが被せられ写真を撮られた。この写真は後に1,000ペセタで売りに来たが高かったので断った。日本の観光地でもよくある商売の手口である。

ショーは22時から始まった。最初、いずれも男性の2人のギタリストと2人の歌手、初老のダンサーが登場し、手拍子と共にハレオという短い歌と踊りがあった。次に、派手な衣装をまとった二人の女性ダンサーの踊りがあった。

続いて中年の男性とスタイル抜群の若い二人の女性のダンサーによる踊りがあった。二人の若い女性が男性に愛を求めるが、男性の決断がはっきりしないため最後は二人ともに愛想をつかされるというストーリーのようであった。

間近で見ると、ステージを強く踏みならすリズムカルなタラップ(サパテア)は迫力がある。手拍子、指鳴らし、両手に持ったカスタネットの早いテンポは、リズム感の卓越した者が相当訓練しないとできるものではないだろう。

フラメンコは、アンダルシア地方で生まれたジブシーの踊りで、生きる喜びや悲しみ、愛、怒り、嘆きといった人間の感情を表現する民族芸能。ダンサーは殆どがジブシーである。

ショーの合間にカスタネットを売りに来た。一組がなんと5,000ペセタというのには些か驚いた。ショーは2時頃まで続けられるようなので12時に店を出た。最後まで残って見ていた上甲氏ら数名はダンサーからチップをねだられ1,000ペスタを渡したところ安いといって怒られたそうである。

(7) オパニエル地区のチャーボラ

マドリードからチンチョンに向かう途中、マドリードの郊外でバラック建ての汚い集落が目にとまった。ローマ郊外で見たのと同じ光景である。

ここはマドリード南西に位置するオパニエル地区で、チャーボラと呼ばれるジブシー部落。スペインのジブシーは、殆どが放浪せずに定住しているが、スペインの一般社会との同化や融合を嫌い、行商、季節労働など契約に縛られない自由な労働を好み独特の生活を送っている。フラメンコや闘牛士を職業とするのもジブシー。

オパニエル地区のチャーボラには200人近いジブシーが掘っ立て小屋のような家を建て、電気や水道を無許可で勝手に引き込んで生活しているようである。

16. チンチョン Chinchon

マドリードからバスで約1時間南東に走るとチンチョンの町に着く。町を見下ろす高台には、15世紀に造られたチンチョン伯爵の城跡がある。崩れ掛けた

城壁の入り口には、跳ね橋の着いたアーチ橋がある。

チンチョンの町の中央にはマヨール広場 Plaza Mayor がある。マヨールとは英語のメジャーmajorと同じ意味で、その町のメインの広場を意味する。

チンチョンの町はすり鉢状の地形をし、すり鉢の底の所にマヨール広場が位置し、その周りに町が放射状に広がっている。このため、町のどこからでも広場に通じている。

マヨール広場では毎年8月14,15,16日に闘牛が行われるとのことで、訪問した日にも闘牛用の仮設スタンドが残されていた。

マヨール広場の近くには17世紀の修道院(アウグスティノ会)を改装して造られたパラドールがある。庭園には自給自足を旨とした修道院の名残か、いちじく、洋なし、ざくろ、栗など実のなる木々が植えられている。庭園には池があり鯉が泳いでいた。日本の鯉であろうか。

マヨール広場から坂を上って町の奥に進むと、アニス Anis 酒やワインを製造し飲ますレストランがあった。アニス酒はチンチョンの名物で、葡萄から造るを蒸留酒のこと。週末にはマドリードからこの店に沢山の人々がやって来るそうだ。



写真 42 チンチョン伯爵の城跡

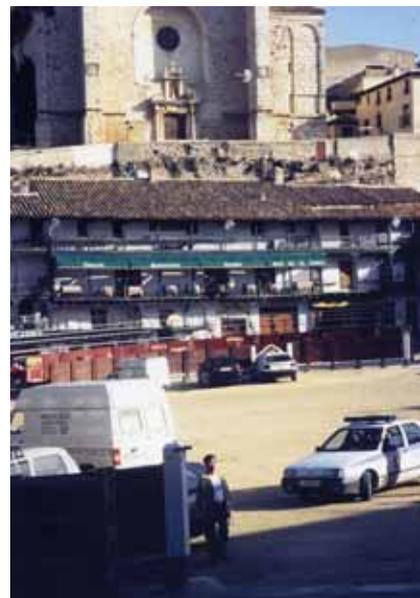


写真 43 マヨール広場と闘牛用の架設スタンド



写真 44 パラドールの庭園



写真 45 アランフェスの離宮

17. アランフェス Aranjuez

スペイン王室の休養地として知られるアランフェスはチンチョンから南西の方向に 30 分程バスで走った所にある。

スペイン王室の離宮が広大な庭園の中に建てられている。この宮殿は 1560 年にフェリッペ 2 世が建てさせ、後にカルロス 3 世が両翼とバロック的装飾を付け加えたもの。

よほど貴重な美術品が展示されているらしく、入場する際に空港と同じ持ち物検査があった。また、内部にはいたるところに警備員が立っていた。贅を尽くした美術品は一見の価値がある。

ここから少し離れた所に農夫の館がある。女王の通りといわれる大木のプラタナスの並木の間を抜けていくと比較的小さな建物が現れる。女王マリア・ルイサの間は壁だけでも 1 億円以上すると言われ、18 世紀特有の絢爛な美をたたえている。

金持ちの農夫の家かと思っていたが、そうではなく農夫の家と土地をカルロス 4 世が買収し、そこに贅沢な小離宮を建てたもの。



写真 46 アランフェスの農夫の館

18. トレド Toledo

(1) トレドの概要

イベリア半島のほぼ中央に位置するトレドはアランフェスから更にバスで南西に約 40 分走った所にある。

三方をぐるりとスペイン最長のタホ川 Rio Tajo に囲まれた高台にそびえる街で、スペイン統一からフェリッペ 2 世によって都がマドリッドに移された 1561 年までの間世界最強の都として繁栄した。

現在のトレド市は、カスティーリャ＝ラ・マンチャ州トレド県の県庁所在地で、人口は 6 万人。内 1.1 万人が城壁で囲まれた旧市街に移住している。旧市街全体がスペインの重要文化財、ユネスコの世界文化遺産の指定を受けている。重要文化財を残す奈良市とは姉妹都市を結んでいる。



写真 47 農夫の館の女王の通り

(2) タホ川に架かる橋

タホ川で隔てられた旧市街の対岸にカテドラルがあり、ここから中世の面影をそのまま残したトレドの旧市街が一望できる。地形は急峻で、タホ川に沿う道路はいたる所で張り出し形式になっている。タホ川にはサン・マルティン橋 Puente de San Martin、ヌエボ橋 Puente Nuevo、アルカンタラ橋 Puente Alcantara の 3 つの古い石造アーチ橋と新しい PC カンチレバー

方式の橋梁が架かっている。

5 径間連続アーチのサン・マルティン橋は 13 世紀の初めにゴシック様式で建設されたものであるが、1368 年に王位継承の争いの際に中央のアーチ部が破壊されてしまった。後に、大司教テノリオの命によって修復されるのであるが、これには面白い逸話が残されている。橋の工事を任されたのは名の通った棟梁であったが工事がかなり進んだ段階で計算間違いに気づき、このまま完成させても支保工をはずせば橋は崩れてしまうことを妻に打ち明ける。大変賢かった棟梁の妻は、夫の名誉を救うため知恵を絞り考えあぐねる。



写真 48 トレドの旧市街



写真 49 タホ川に架かるサン・マルティン橋



写真 50 トレドのカテドラル



写真 51 急峻な地形につくられたレドの道路

ある晩、工事現場で火が出、夜空を染める真っ赤な炎の中で完成間近な橋は木枠を失って崩れ落ちる。火を放ったのは棟梁の妻で、その知恵のおかげで夫は名誉を損なうことなく再度工事に取り組み立派に橋を完成させたとのこと。

歩測によると、サン・マルティン橋の橋長は 140m、幅員 5.5m であった。

(3) トレドのカテドラル

トレドの旧市街は、カテドラルを中心に狭い街路が迷路のように広がっている。

トレドのカテドラルは 1226 年のフェルナンド 3 世の時代に建築が始められ 250 年以上経過した 1493 年に完成されたスペイン・カトリックの本山ともいべき大聖堂である。

完成後も 19 世紀に至るまで無数の増改築工事が行われ、それぞれの時代の様式が導入されていったので、ゴシックからルネッサンス、バロック、ネオクラシック、そしてムデハルといった建築様式を見ることができる。

カテドラルの近くに屋台が出て写真集を売っていた。日本語で「日本語の本があるよ」といって差し出したので購入する。写真がきれいで立派な本にも関わらず 1,000 ペスタと安い。イタリアではどこに行っても日本語版の写真集やガイドブックを見かけたが、スペインでお目にかかったのはここだけであった。ここはマドリッドにも近く、日本人観光客が多いのであろう。

(4) サント・トメ教会

サント・トメ教会の壁面には、画家エル・グレコの最高傑作と言われる「カルガス伯の埋葬」という絵が描かれている。

14 世紀にオルガス地方を治めていた大変信仰心が厚く情け深い領主ゴンサロ・ルイス・デ・トレドの生前の善行に報いるために、神は二人の聖人を埋葬に送り、その汚れなき高貴な魂を天国へ迎え入れたという様子を、彼が死んだ 250 年後に教会から依頼されたエル・グレコが描いたもの。

教会がエル・グレコに支払った代金は莫大で、教会の持ち金だけでは足らなかったとされている。

(5) トレドでのショッピング

サント・トメ教会周辺には観光客目当ての土産物店が軒を連ねている。

トレドで有名なのは、象がん細工、刃物、タペラ焼きの食器。展示されている刃物の中に日本刀があるのには驚いた。ヌンチャクも売っていた。

タペラ焼きを売る店では、主人が絵皿を壺に叩きつけ、タペラ焼きがいかに丈夫で割れにくいかを説明してくれた。愛媛の砥部焼きとどちらが強いかな勝負をしてみると面白いと思った。



写真 50 タペラ焼きの絵皿を売るトレドの土産屋

19. スペイン語と日本語

トレドからマドリッドへ帰るバスの中で、ガイドよりスペイン語から転化した日本語について説明があったので、最後に記しておこう。

スペインと日本との関係は古く、1549年にキリスト教布教のためフランシスコ・ザビエルが鹿児島(薩摩)にやってくる。そして、山口の大内義隆の助けをかり、山口に教会を建てている。このため、日本語に転化したスペイン語があっても不思議ではないが、元来の日本語と思っていた言葉がスペイン語から転化したものと聞いて驚いた。

おじや：土鍋のことをスペイン語でオージャー、これが転じて「おじや」になった。

おいちよかぶ：数字の8はスペイン語でオーチョ。

ありがとう：「ありがとう」はスペイン語でグラシアだがポルトガル語ではオグリガード。これが転じて「ありがとう」になった。

よ(私)：私はスペイン語でジョ。転じて殿様が使う「よ」となった。

カステラ：菓子を入れた絵皿のことをスペイン語でカステージャ。絵皿を菓子と勘違いしてカステラとなった。

天ぷら：宣教師が魚を揚げる料理では油の温度(テンペラトゥラ)が大事と説明したのを、揚げ物を天ぷらと勘違いした。

軍手：手袋はスペイン語でグアンテス。これが転じて軍手になった。

その他にも、合羽、ポタン、ビー玉、(船の)～丸はスペイン語から日本語になったもの。

逆に、日本語がスペイン語として使われているもの

に、カラオケ、タマゴッチ、ボンサイ(盆栽)、オギノという言葉がある。オギノとは避妊法であるオギノ式の意味で、オギノ式で失敗して生まれた子供は「オギノの子供」と呼ばれているようだ。

20. あとがき

スペインへ発つ前にガイドブックで9月末から10月のマドリッドの気温を調べると18°Cとなっていた。このため長袖のセータなど秋の服装を準備していたが、マドリッドの気温は日中30°Cを超える暑さであった。30°Cといっても、湿度が低いので日陰に入ると暑くはないが、それでもTシャツ一枚で十分であった。

マドリッドを発つ最後の夜、パジャマも含め全てスーツケースにしまい込み、下着だけで寝てしまったところ、夜は温度が15°Cまで低下し風邪をひいてしまった。日本に帰って1週間が経過したが今だに完治しない。スペイン風邪はしつこい。

短い期間ではあったがスペインを見聞して感じたことは、インフラ整備の充実と生活の豊かさである。国内総生産額は日本よりもはるかに低く、失業率は20%を超えている。にも関わらず、高速道路は無料であるし、どんな田舎でも水洗トイレが完備し、小さい町でも電線が地中化されている。そして市民の生活に潤いとゆとりが感じられる。

朝もまともに食わず長時間かけて出勤し、昼はうどんを流し込み、遅くまで残業し、必死で働いても住宅ローンや子供の教育費に追われ、気が付いたら定年を迎えている。これが今の日本人の標準的な生活であろう。何かの間違ったように思えてならない。

スペインで見聞したことをいつまでも記憶に留めたいという思いと、家族や友人達に知らせたいという気持ちからこの拙文を上梓することにした。

しかし、スペインでとったメモや写真、買ってきた写真集などを見ても、旧約聖書、新約聖書、キリスト教美術に関する知識を全く持たない筆者にとって、スペイン中世の美術を理解し、それを表現することは不可能であった。

最後に、本旅行で大変お世話になった日本興業株の菊沢徹士社長、海外企画株の添乗員アイリーン・高野さんをはじめ同行したメンバーの皆様に深甚の感謝を申し上げます。



写真 53 ツアー参加者（サンチャゴ・デ・コンポステーラの歓びの丘にて）

